

特別支援教育研究論文集

—平成30年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所

特別支援学校(聴覚障害)の
乳幼児教育相談における保護者支援
—「週の記録」に記述された母親の不安や疑問に焦点を当てて—

筑波大学附属聴覚特別支援学校

研究代表	吉野 賢吾	教諭
	鎌田ルリ子	教諭
	森 敬子	教諭
	杉山 砂寿	教諭
	土手 信	教諭
	佐藤 輝子	教諭
	桑原美和子	教諭

平成31年3月

公益財団法人 みずほ教育福祉財団

要 旨

本校の乳幼児教育相談では、聴覚に障害がある0歳から2歳の子どもと母親を中心とした保護者に対する支援を行っている。その保護者支援の一環として、「週の記録」を活用している。母親が一週間を振り返り、子どもの聞こえに関する気づきや一緒に遊んだ様子等を記入し、担当者に提出するものである。その「週の記録」の中には様々な記述があり、中には母親の不安や疑問が含まれた記述もある。

今回、本校の乳幼児教育相談で支援を受けている27組の2歳児の母子の中から、0歳の時期から通ってきている6組の母子を抽出し、その母親たちが提出した「週の記録」の中の不安や疑問が含まれた記述に焦点を当てて検討した。その結果、母親たちは「ことばの育ち」「兄弟姉妹のかかわり」「保育所」「体の成長、遊び、生活習慣」についての不安や疑問をもち、子どもの成長に応じて「補聴器や人工内耳の装用習慣」「自己主張」「イヤイヤ期」「ことばかけ」「ことばの理解と表出」についての不安や疑問をもっていることが明らかになった。また子どもの聴力によっては「手話」に関する迷いや疑問をもち、補聴機器に関しては「人工内耳手術」のことについて不安や疑問をもっていた。

本校の乳幼児教育相談では、そのような母親の不安や疑問に対して、担当者が「週の記録」にコメントを残し、場合によっては話し合うことで以下のような支援を行っている。

- ・「ことばの育ち」に対しては視覚的な補助手段を使いながら、子どもが母親に話しかけられたことが「わかる」経験を大切にすることを伝える。
- ・「兄弟姉妹のかかわり」では、母親が兄弟姉妹の気持ちも大切にしながらかかわれるよう支える。
- ・「保育所」に関する支援では、担当者が保育所を訪問し、直接保育士らと話し合うことで、聴覚に障害がある子どものことについて共通理解できるようにしている。
- ・「体の成長、遊び、生活習慣」については、耳やことばの育ちの面だけではなく、子どもの全体的な成長を母親と一緒に支える。
- ・「補聴器や人工内耳の装用習慣」では、子どもに装用習慣が身につくまで根気強く母親を支える。
- ・「自己主張」「イヤイヤ期」に対する支援では、「こうしたい」「イヤだ」という気持ちを受け入れつつ、子どもの気持ちが切り替わるまで時間をかけてかかわる必要があることを伝える。
- ・「ことばかけ」「ことばの理解と表出」については、その時その時の子どものことばの育ちを把握し、具体的なかかわり方を伝える。
- ・「手話」については「ことばの育ち」の支援と同様に、視覚的な補助手段の大切さを伝える。
- ・「人工内耳手術」に関しては、母親の人工内耳に対する不安や疑問、迷いを受けとめ、母親の質問に答える形で話し合いを重ねる。

これらの支援の具体的な内容について検討したところ、本校の乳幼児教育相談の担当者は、母親たちが生活の中で自信と目的をもって子どもとかかわることができるようになることをねらい、母親の気づきや不安、迷い、疑問を肯定的に受けとめ、認めながら支援を行っていることが確認できた。

キーワード：乳幼児教育相談 母親支援 週の記録 母親の不安や疑問